

平成24年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立野々市明倫高等学校

重点目標	具体的取組	実施状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
1. 学校内外の研修を通して教員の授業力の向上を図り、生徒の学習意欲の高揚とともに、進路希望の達成に向けて粘り強く取り組む姿勢を涵養する。	① 授業を個々の生徒の実態に即して効果的に実施し、さらに習得した知識を活用できるように思考力・探求力を高める。	習得した力を活用するための問題を A 毎時間与えている B 1週間に1度与えている C 2週間に1度与えている D 与えていない	A+B=87.8% A 38.8% B 49.0%	A評価が前期32%から最終38.8%、B評価が前期46%から最終49%に全体として上昇した。次年度も、生徒が自ら考え探求しようとする場面を、教員各自が研究しながら授業で与えるように取り組んでいきたい。
		1, 2年の英数国の学力試験偏差値54以上の生徒が A 55人以上 B 45人以上 C 35人以上 D 35人未満	1年 D 2年 D	1年 28人(10月) → 31人(1月) 2年 16人(10月) → 28人(2月) 1, 2年とも偏差値54以上の生徒数は増加傾向ではあるが、35人には達しなかった。次年度はよりきめ細かい学習指導に教員一丸で取り組んでいきたい。
	② 研究授業・公開授業などを通して、授業評価で検証しながら、授業改善に努める。	生徒の授業評価で、授業が理解できると感じる生徒の割合が A 85%以上 B 80%以上 C 75%以上 D 75%未満	B 82.2% よくあてはまる 35.5% ほぼあてはまる 46.7%	前期79.8%から最終82.2%に上昇しB評価であった。授業において、生徒の関心を引き出し、生徒の主体的な活動に重点をおいて取り組んだ結果、生徒の理解度・意欲が向上してきている。
		授業改善に役立つ研究協議会が実施できたと感じる教員が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	A 91.5% よくあてはまる 29.8% ほぼあてはまる 61.7%	前期78%から最終91.5%に上昇しA評価であった。今年度は「習得した知識を活用する力の育成」を研究テーマとして全教員が共通認識のうえ、研究協議会に取り組んだ成果があらわれた。
	③ 基礎基本の定着を図ることにより、学習意欲を高め、課題の工夫などにより学習時間の増加を図る。	各クラスの平日の平均家庭学習時間が、1・2年生で100分以上確保している生徒が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	C 64.0% 1年 73.3% 2年 53.1%	前期71%のB評価から最終64%に下降しC評価であった。1年生は7割の生徒が達成しているが、2年生での学習不足の改善のため、生徒の学習意欲をより高め、工夫して家庭学習時間の確保が来年度の課題である。

重点目標	具体的取組	実施状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
	④ 時期に応じたきめ細かな面接指導により、生徒の進路意識を高め、早期に目標を設定させる。	生徒の実態に合わせた個人面談を年間に A 8回以上実施した B 6回以上実施した C 4回以上実施した D 4回未満であった	A + B = 61.9% A 9.5% B 38.1%	A + B 評価が、前期37.5%から、最終的には61.9%になったが、目標としていたA + B評価80%には及ばなかった。次年度は、生徒の進路実現に向けて、よりきめ細かい指導を徹底し、面談回数を増やしていく。
	⑤ 国公立大学への志望者数を増やし、合格者数を増加させる。	個別学力試験に向けた補習や小論文指導が効果的に A 実施できた B 概ね実施できた C あまり実施できなかった D 全く実施できなかった	A + B = 81.4% A 41.9% B 39.5%	A 41.9% B 39.5% A評価が昨年度の20.8%から41.9%に倍増した。推薦入試では国公立大学に14名が合格した。センター試験後は授業形態を実践に即した形態に変更して、個々の生徒に対応した指導に心掛けた。
		国公立大学合格者数が A 60人以上 B 55人以上 C 50人以上 D 50人未満	A 60名	合格者61名で、そのうち現役生は56名である。昨年度より22名増加し、A評価であった。センター試験対策や個別指導の成果の結果だと思われる。特に、今年度は開学以来初の東京大学に現役で合格者を出したことは特出すべき実績となった。
		難関私大合格者数が A 20人以上 B 15人以上 C 10人以上 D 10人未満	A 33名	合格者33名で、昨年度の9名と比較すると、大幅に増加した。早稲田大学にも現役で合格することができた。生徒の志望に対応した個に応じた各教科別の受験指導が実を結び成果があらわれた。
学校関係者評価委員会の評価	・中学校ではすでに新学習指導要領が実施されており、言語活動の充実を中心とした、生徒を活動させ生徒主体の授業になってきている。高校においても、グループ活動などを積極的に取り入れ、生徒にもっと活動させ生徒主体の授業を心掛けてほしい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	・教員が生徒との双方向性の授業を心掛け、進路指導・学習指導をきめ細かに行うことにより、生徒が自ら主体的に学習に取り組もうとする意欲を高める。			

重点目標	具体的取組	実施状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
2. 部活動や生徒会活動の活性化と体験的学習活動の充実に努め、チャレンジ精神の涵養を図るとともに、地域に開かれた、明るく活力ある学校づくりを推進する。	⑥ 部活動の加入をうながし、学校全体の活性化を図る。生徒のチャレンジ精神と部活動の実力向上を目指す。	1、2年生の12月の部の加入率が A 86%以上 B 84%以上 C 82%以上 D 82%未満	B 84.8%	昨年度の12月の部の加入率82.6%と比較すると、2%程度加入率は増加した。高い入部率だが、生徒の意欲を喚起し、部活動の一層の活性化を図っていきたい。
		設定した目標を達成できた部の割合が A 60%以上 B 50%以上 C 40%以上 D 40%未満	A 86.2% 運動部 76.5%	前期62.5%から最終86.2%に上昇しA評価であった。運動部についても、52.9%から76.5%に上昇し、男子ソフト部が新人戦で優勝するなど成績は確実に向上してきた。
	⑦ 体育授業時に運動量を確保し、特に持久力の向上を図る。	1、2年生の新体力テストで、1回目より向上した生徒が (シャトルラン) A 75%以上 B 70%以上 C 65%以上 D 65%未満	D 59.2% 1年 62.2% 2年 56.2%	昨年度とはほぼ同様の数値に止まってしまった。男子が70.4%の向上に対し、女子が48%の向上であった。女子に対しては工夫が必要であり、総合体力の向上も考えなければならない。
	⑧ 地域の文化財、歴史、特産物について調べ、英訳し国内外に発信する。	ふるさとについて理解し、満足感を得た生徒が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	D 49.8% よくあてはまる 14.8% ほぼあてはまる 35.0%	今年度「ふるさと発見プロジェクト」に取り組んだ1年は57.1%で、2年(47.1%)・3年(45.4%)よりは10%程度高かったが、次年度はより積極的に取り組んでいきたい。
	⑨ 「朝の挨拶運動」などのPTA活動に積極的に参加してもらい、生徒の育成をバックアップしてもらう。	PTA活動に保護者が A 大いに満足している B ある程度満足している C 少しは満足している D 不満である	A+B=79.0% A 20.0% B 59.0%	ある程度満足している以上の割合は昨年度よりやや減少したが、今年度、初めて土日開催となった明倫際では約700名の来客があり、また、PTAに積極的に模擬店等に参加していただき、PTA活動は活性化した。
学校関係者評価委員会の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・「ふるさと発見プロジェクト」は成果を上げているようだが、次年度以降はどのように展開させていくのか。 ・部活動に所属している生徒の中には家庭学習時間の十分な確保が難しい生徒もいるようだが、効率の良い家庭学習法について考えてほしい。 			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度引き続き、1年生の総合的な学習の時間を活用し、生徒の地域への関心を高める取組を実施する。 ・家庭学習の効果的な取り組みについては、入学後の4月のガイダンスをより充実させ、家庭学習時間調査などをもとに面接指導をきめ細かに実施していく。 			

重点目標	具体的取組	実施状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
3. 節度ある生活習慣の確立と安全意識の高揚に努め、自ら挨拶し、に参加する心豊かな人材の育成を図る。	⑩ 登校指導や生活指導などを通して、あいさつがしっかりできる人間の育成を図る。	生徒同士や教職員、外部からの来客に対し、あいさつを自分からすすんで A することができた B できなかった	A 73.6%	生徒のあいさつへの意識と、教員の生徒に対するあいさつの意識に大きな差がある。教員も生徒に対して、積極的にあいさつをするという姿勢も必要ではないかと思われる。
	⑪ 交通安全教室や街頭指導を通して、自転車の安全運転の励行を図る。	交通ルール（自転車の二人乗りや携帯電話を操作しながら等の運転をしない）を遵守している生徒が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	A + B = 95.1% よくあてはまる 63.7% ほぼあてはまる 31.4%	自転車事故の報告件数は昨年度20件から今年度13件と減少したが、生徒の交通ルール遵守意識と、登下校を指導している教員が感じる生徒の交通ルール遵守の意識には、まだまだ、隔たりがある。地道な指導を継続していきたい。
	⑫ 環境美化の意識を持ち、全員一斉清掃に取り組める生徒の育成を図る。	清掃活動に A 積極的に取り組んだ B ある程度積極的に取り組んだ C 取り組んだ D あまり取り組まなかった	A + B = 83.9% A 35.5% B 48.4%	開学以来、全員一斉清掃を実施しており、清掃に対する態度・意識はある程度生徒には身につけているが、より、自ら進んで積極的に清掃に取り組む意欲、姿勢を喚起する指導を徹底していきたい。
	⑬ 生徒の良好な人間関係作りを支援する。	生徒の変化に対して A 素早く察知し、対応することができた B 素早く対処し、解決に至った C 素早い対処ができず、解決が遅れた D 発見・対処が遅れた	A + B = 89.8% A 32.7% B 57.1%	いじめ調査や面談など日頃から生徒の様子に気を配り、生徒指導課、学年、相談室、保健室が連携し、早期発見・早期対策に努めている。今後も全職員が生徒の変化を注意深く観察し対応していきたい。
	⑭ ボランティア活動への自発的な参加を促す。	ボランティア活動に、 A 年5回以上参加した B 年3回以上参加した C 年2回以上参加した D 年2回未満であった	A + B = 12.0% A 3.2% B 8.8%	野々市市主催の清掃活動への全校参加や、今年度、部活動加入者は、部活動単位で最低1回以上はボランティア活動に参加している。しかし、生徒には主体的に参加しているという意識が根付いていないようである。生徒が自発的にボランティアに参加しているという実施形態を考え直す必要がある。
	⑮ 各学年団と連携し、生徒の読書を促進する。	全学年の生徒一人あたりの年平均貸出冊数が A 7.0冊以上 B 6.0冊以上 C 5.0冊以上 D 5.0冊未満	A 7.0冊	2.6冊（H21年度）4.1冊（H22年度）6.1冊（H23年度）と着実に貸出し冊数は増加し、今年度は7.0冊でA評価であった。しかし、生徒が何冊読んだかの量より、生徒が読書で何を得たかの質が問題ではないかという指摘を委員より頂いたので、生徒が主体的に読書に取り組む姿勢を育成していきたい。
学校関係者評価委員会の評価	<ul style="list-style-type: none"> 読書については、何冊読んだかの量よりも質だと思う。どんな読書をしているかが問題である。 野々市市としてもいろいろな形でボランティア活動等に協力できると思うので、連携を密にして活用していただきたい。 			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	<ul style="list-style-type: none"> 朝学習の時間等を活用し、生徒が主体的に読書に取り組もうとする態度を涵養し、単なる読書量の増加ではなく読書の質の向上を図る。 学校祭、ボランティア活動などを活用し、地域の中学校、大学、野々市市との連携を一層推進する。 			